



アイデアの結晶化に向けて

-Youkobo Returnee Residence Program 第2弾

サーラ・エクストロムによる2カ月にわたる創作制作活動

目次

1.事業の紹介

2.サーラ・エクストロムによる2カ月にわたる滞在制作活動

2-1 作家紹介

2-2 滞在制作の要約

2-3 遊工房での展示

2-4 アーティストトークおよびディスカッションイベント

2-5 振り返り インタビュー

2-6 作家略歴

3.滞在報告-サーラ・エクストロム

助成：平成30年度 文化庁 アーティスト・イン・レジデンス活動支援事業

1. 事業の紹介

アーティスト・イン・レジデンスはアーティストの創造的な実践において重要な役割を果たし、彼らが様々な文化や環境下で有意義な活動ができるように、探求やネットワークを構築するための援助や、実験試行の場を提供し支援しています。アーティストにとっての即時的な効果ではなく長期的な活動の中で、新しい発見に結びつく「結晶化」の準備をする場だと言えます。

遊工房が、アーティストを迎え、支援してきた30年を祝福し振り返る中で、今まで、ここに再び戻ってきた、アーティストは少なくありませんでした。この記念すべき30年目の機会を取らえて、私たちは、2017年に遊工房リターニング・アーティスト・レジデンスプログラムを開始しました。ここで紹介する、アーティスト達は、以前に遊工房でレジデンスを経験し、魅力的な創造的な研究を、さらに発展させています。また、参加アーティストが展覧会（日本人とのコラボレーション）を行い、パブリック・トークイベントを開催し、自身の活動の振り返りや現在の経験について話すとともに、アーティストとホストにとってのレジデンス滞在の意義について議論する機会としています。

2. サーラ・エクストロムによる2ヶ月にわたる創作制作活動：2018年10月1日～11月30日

2-1_作家紹介：サーラ・エクストロム

遊工房リターナー・レジデンスプログラム（以下YRP）の第2部で、フィンランド/トゥルクを拠点とするビジュアルアーティスト、サーラ・エクストロムが、遊工房で2ヶ月間の滞在に招聘しました。2006年に東京写真美術館で開催された展覧会「光と影」に参加したときに、初めて遊工房のレジデンスプログラムを経験し、2009年に再度、遊工房で、3ヶ月の滞在制作をしました。その成果展は、ダイナミックでありながら繊細で美しく怪しい描写が、心を引きつける印象的な展覧会でした。主には写真と8mmフィルムの作品でした。

2-2_滞在制作の要約

遊工房での彼女の3回目の滞在の機会に、サーラはフィンランドで始めた環境問題についてのプロジェクトを継続し取り上げ、2ヶ月間の滞在中、2つの分野に焦点を当て活動しました。8mmの映画作品と日常の食料と材料を被写体とした写真作品です。その成果は、日本人アーティスト鶴飼美紀さんとのコラボレーション展として開催、冊子「Amnion・ものあい」を展示の記録として出版しました。滞在中、活発にリサーチをし、能面師のスタジオを訪れるという特別な機会を得て、多くの能面の写真を記録し、能面師・長澤茂春氏へのインタビューも実現しました。能面から非常に強い印象と影響を受け、彼とのコラボレーションのチャンスも念頭に入れ帰国しました。このプロジェクトの完成には十分な時間が必要で、今はまだ模索の段階です。

2-3_遊工房での展示

日付：2018年11月3日～23日

会場：スタジオ3、遊工房アートスペース

タイトル：「Amnion/羊膜」（発生中の胚を保護する薄い膜を意味する）

サーラ・エクストロムは、遊工房での展覧会で、ビデオと写真を発表しました。

「Amnion」と題された、8mmフィルムと、一連の写真の中で、フィンランドと日本の素材を組み合わせ、有機ポリマーと合成ポリマー分子がDNAを模倣するビジョンを作り出し、透明なプラスチックの膜の下で、ゆっくり有機物と化合し新しい何かに変化し始めていくことを表しています。

遊工房企画として、日本人滞在招聘アーティストの鶴飼美紀と同時開催の展示を行い、作品を通じた交流をしました。両者の作品に共通するダイナミズムと、心の琴線を揺るがず繊細さ、時間の移ろいの中で素材とモチーフの変化を明確にしていく作品は、観る者に問い掛けを迫るものでした。

Image from “ Amnion ”



2-4_アーティストトークおよびディスカッションイベント

日付：2018年11月10日

スピーカー：サーラ・エクストロム（招待作家）、鵜飼美紀、カリソライテ・ウヒラ（アーティスト）

参加者数：20名（参加者の中には、アーティスト、写真家、その他アート関連の人々も含まれていた。2006年または2009年の滞在中に縁を持った知人達も含まれた。）

アーティストカタログの出版「羊膜・ものあい」‘Amnion・The world in between’

サーラ・エクストロムと鵜飼美紀の同時開催展を記念し出版。

2-5_振り返り インタビュー

実施日：2018年11月21日

対談者：サーラ・エクストロム、村田達彦、村田弘子、辻真木子（遊工房アートスペース）

遊工房での滞在制作を3度体験したサーラ・エクストロムへの、遊工房のAIRプログラムの特徴や評価など中心に実施した対談、インタビューの要約。

・最近のトレンドとして、35歳までなどの若手や新進気鋭のアーティストを受けるものが多いが、遊工房は年齢制限がなく、様々な年齢が混ざっているのが特徴だ。また、小規模で少し風変わりな遊工房は、商業ギャラリーではないからこそできることがある。今回の鶴飼さんとの交流を含めたプログラム・展示は、時流・はやりに乗ってよく見るようなタイプの展示に収まっておらず気に入っている。

・東京にこのような制作と滞在のためのプライベート環境が整っているのは強みである。また、都心と郊外の両方を経験できる立地も良い。サポート面では、各アーティストのニーズに応じており、作品につながるコネクションを作ってくれたのはありがたい。また、カタログ作成など、プログラム終了後にも有効な副産物があるのは、長期的に見ても良い。

・今回は展示をすることが決まっている2ヶ月のプログラムとして、充実できたが、正直言って1ヶ月で準備（制作/展示準備）をするのはなかなか厳しかった。1-2ヶ月が適当な作家もいるが、次回は展示をせずに、リサーチと制作のみや3ヶ月以上の滞在など考えてみたい。リターニーの許されないAIRもそれなりの理屈があると思う。また、滞在期間も含め、アーティスト・研究者の希望、意思を尊重してくれるプログラムはありがたい。

・滞在期間中の現地での展覧会などのオープニングへの参加や、日本にいるアーティストの紹介や交流機会がもっと出来たらと良かったと思う。他のAIRでもなかなかと思うが、情報提供だけでなく機会作りなどに工夫がありそうだ。多くの滞在アーティストは希望していると思う。

2-6_作家略歴

サーラ・エクストロム（1965）

1983 - 1985 トゥルク芸術アカデミー、トゥルク・フィンランド

1995 - 1996 北アリゾナ大学、フラッグスタッフ・米国

彼女はフィンランドのトゥルクを拠点として活動しています。2018年にAVEK-フィンランドのメディア賞を受賞、2017年には南西フィンランドの芸術賞を受賞しています。彼女のビデオと作品は、フィンランドや国際的な映画祭で多く発表され、とりわけ、キアスマ美術館でのグループ展や個展も開催され、フィンランドの現代美術、ニューヨークのISCP東京、パリのグランパレ、コブレンツのルートヴィヒ美術館、ストックホルムの王立美術アカデミー、スペインのECCO、コペンハーゲンのシャルロットンボー美術館などで開催されています。また、作品は、フィンランド国内外の公共コレクションとも成っています。

3. 滞在報告 - サーラ・エクストロム

遊工房アートスペースでのリターニー・レジデンスプログラム 2018年10月 - 2018年11月

2018年10月から11月にかけて、東京での30年にわたる重要かつ先駆的なアーティスト・イン・レジデンス活動を記念する、リターニー・レジデンスプログラムへの招待状を遊工房アートスペースから受け取ることができ光栄に思います。

2006年に初めて、また2009年にも遊工房アートスペースに滞在したことは、私の芸術活動にとって非常に重要でした。これらの滞在で日本のフラワーアレンジメントアート - 生け花 - について、私の個人的なアプローチの研究と発展を可能にし、日本の審美的文化をより探求することができました。中川幸夫（1918年 - 2012年）の前衛的で力強いフラワーアレンジメントを知ることになり、その生と死のサイクルを含む深遠な作品は、いまだに私を驚嘆させ刺激し続けています。2010 - 2011年にフィンランドの現代美術館キアスマ、クンツィ美術館、そしてオーランド美術館で開催された、大規模な巡回個展「Limbus」では、遊工房アートスペースで滞在制作した一連の写真が展示されました。一連の新しい作品を制作するために、滞在が重要であったのみならず、その経験は私にとって非常に深いレベルで残りました。

遊工房アートスペースでの再招聘のプログラムは、私のアートに大きな影響を与えた場所を再び訪れるという重要な可能性を提供しました。2か月間には、ギャラリースペースでの3週間の展覧会の間に遊工房で制作された新しいアート作品を作ることと、発表することの両方の機会が含まれました。展覧会のスケジュールと、公園内のトロール展を結んで、より多くの聴衆を共有し地元の文化関係者や芸術家や専門家と協働できました。

私の展覧会のプランは、事前にフィンランドで撮影した素材を東京の現場で撮影された素材と組み合わせるというものでした。映画を通して人々が環境問題に注意を向けることを望む、8 mmフィルムで撮影された作品は、私たちが生み出しているゴミの山に焦点を当てています。それは、今や私たちのコントロールを超えて拡大し、一連のスライドは、都市の郊外にある埋め立て地の巨大なインキュベーターの中で合成プラスチックがゆっくり有機物と融合していく混沌とした未来の標本のようなものです。

10月は集中的に8 mmフィルムと展覧会のための一連のスライドを制作しました。遊工房アートスペースの支援を得て、技術的な問題の解決とプロジェクトの実現に向けて、特に個人的に尽力くださった、レトロ・エンタープライズ・フィルムラボのスタッフ・関浩司さんのお蔭で、フィルムを現像し、スキャンすることができました。また、自由な新しいシリーズの写真を提示するための斬新な手法として、現像せずに、スライドを展示するために、ライトボックスを使用したいと考え、遊工房のネットワークを通して、小関英明さんに特注のライトボックス制作をお願いしました。作品の発表方法やバランスのとれた魅力的な展覧会の作り方は、私のプロジェクトにとって重要な部分です。

作品制作の過程で、非常に興味深い日本の芸術家・鵜飼美紀の作品によって、私は、ポジティブで感動的な影響を受け、また彼女も同時に滞在制作で作品を発表しました。展覧会は遊工房アートスペースによってキュレーションされ、お互いが同時期に遊工房で隣接して展示をするためのアーティストとして選ばれたことを嬉しく思います。私たちの作品は、会話にあがるほど美しく、お互いに貢献し、そして作品を鑑賞し体験するための複数の可能性を開いたことは明らかです。

鵜飼美紀さんの時代を超越した、直接的で、強く、肉体的でありながら繊細な芸術、そして彼女の誠実な理解と物質的感覚、はかなさ、そしてバランスについて大いに賞賛します。遊工房がどのように展覧会をキュレーションするかについての洞察に満ちた方法にも感銘を受けました。流行に左右されず、現代アート、オルタナティブ・アート、そして野心的アートとのコミュニケーションが、アートと生活に何が重要かという個人的なビジョンと調和して豊かな空間を作り出します。

滞在中、仲間のアーティストとの交流を楽しみ、鵜飼美紀さんが提案したコラボレーションに参加する機会が得られ、使用した素材を組み合わせた一連の小さなアートワークができました。また、滞在中のアーティストとのコラボレーションも実現しました。ニュージーランドのパフォーマンス・アーティスト、カリソライテ・ウヒラのプラスチックゴミ袋を纏って、鵜飼美紀作品の大きなラテックス・パネルの前に座ってもらい撮影しました。

私たちを迎え入れてくれた空間で、2人のアーティストによるこのユニークな出会いを残すために遊工房アートスペースは、鵜飼美紀さんと私の展覧会のカタログを制作しています。素敵な出版物はドキュメンテーションとそれ自身のアートワークの両方であり、それは展示の終了後もずっと、私達の展覧会と遊工房での経験のレガシーとして残ることでしょう。

遊工房アートスペースで滞在中のアーティストと一緒にトークを行い、「FIN /JPN LAB」-日本のフィンランドセンターのセミナーにも参加し、他のレジデンスアーティストと出会い、TOKASのレジデンス、日本のフィンランドセンターやWaria Art Break AIRのスタッフと交流する機会がありました。2006年の青森現代美術センターでの出会いで、再会を楽しみにしていた日沼禎子教授の招待を受けて、女子美術大学で「国際文化交流と研究」プログラムの講義をしました。

遊工房アートスペースで実現した展覧会に加えて、私は新しい短編映画のための素材の撮影も始めることができました。弘子と達彦が、三代目の能面打ち師である長澤重春氏との場を作ってくれ、スタジオに同伴し、彼の作品と魅力的で表現力豊かな面の豊かなコレクションを記録することができました。長い伝統に属するこれらの仮面は、特定の意味を持ち、能楽におけるある種の原型を表しています。しかし、同時に人間の喜び、悲劇、怒りの普遍的な感情を体現していたので、各々が、それぞれの声で話し始めました。時間がほとんどなくなってしまい、これは私が研究し続けるプロジェクトとなり、近い将来に東京での研究の機会があることを願っています。

遊工房アートスペースで個性的な雰囲気を出し出す人々との議論やミーティングの中で、私はアーティスト・イン・レジデンスがどのように機能するのか、そしてそれを続けるために何が求められるのかについて、少し理解を深めました。遊工房が、これからも長年にわたって重要な仕事をしてくれることを願います。私たち、アーティストが創作する作品に直接影響を与え、日本の内外両方の文化の大使のように機能することで、彼らは芸術的基盤と国際的アーティストと日本のアーティストのための一時的な家としてのミッションを続けることができます。フィンランドの芸術家の間では、遊工房アートスペースは心からのコンセプト、つまり高く評価され、地位を確立しています。

